

II

(現代文)

解答欄は

II

の

A

ス

次の文章は玉岡かおるの小説『ひこばえに咲く』の一節である。主人公の上羽硯(うえばけん)(ケン)は青森の津軽(つがる)で絵を描き続けている画家である。これを読んで、後の問に答えよ。

上羽硯を追ったドキュメンタリーが放送されたのは五月だった。

東京でも放送されたので、香魚子(あゆこ)は個展の準備に追われながら一人、見た。ケン(注1)は、フク(注2)が数日も前から日曜の六時から放送だとうるさくくり返したうえ、ケンのアトリエに押しかけてきてテレビをつけるのでしかたなく、見た。

岩木山から始まる映像は美しく、ケンには日々見慣れている場所とは違うように見えた。

テレビは津軽の風景を(a)あますことなく見せたうえで、上羽硯という一人の男にせまっていた。一枚の絵も売らず、七十年間描きためた百五十枚もの絵を(ア)納屋の天井裏に眠らせていた、その無欲な生き方のわけを、番組はその生い立ちからひもといていく。

旧制中学を卒業し、東京で絵を学びたいと言った時、小学校の校長である父は、絵などよりも地に足の着いた実学を勉強せよと(b)頭ごなしに反対した。映し出された父親の白黒写真は、すずやかな夏の背広につば広帽子をかぶった、
郷土の紳士という姿で、厳格そうな表情をして、正面を見ていた。

ケンの上京がなかったのは、同じく教師であった母親が援護してくれたからだだった。

女学校を卒業した母は、村で唯一人ピアノが弾ける女性であり、芸術を解する人だった。厳格な父や、まだ壮健だった舅(しゅうと)に仕え、ケンを筆頭に五人の子供を育てながら村の小学校の教壇に立つ才媛でもあった。

「(ア)納屋にしまっていた絵には、いつ描いたかの日付がなかった」

と、ナレーションは、絵の片隅を映し出す。

たしかにどの絵にも署名がなかった。だから画集を作る時、香魚子は困った。これはいつ描いたの、と尋ねるたびに、ケンはうつむき、(1)「そうだな日付を入れておけばよかっただと、心からすまなそうに詫(わ)びたものだ。」

「どうして日付を入れなかったのですか？」

取材に来たインタビュアーの問いにも、いやあ、それは、と口ごもるケン。人に見せるなら日付も入れて、できあがっていないければならない。だがそういう意味では、ケンの絵はどれも、まだ未完成だということなのだ。

「どれも、余白はないし、完璧に色がほどこされているから、未完成ではないのですよね？」

たたみかけるインタビュアーに、ケンがほんのりと笑って返す。

「いや、できあがつてるなんて言えねえさ。だがらそばき置いて、また描きたくなったら取り出して描く」

もう香魚子たちにはよくわかっていた。描くための絵であるのだから、日付なんか、あるはずない。ケンはまだまだその絵を描き続けるつもりなのだ。ケンの絵は、ケンのためだけのもの。誰かに見せるつもりはないし、誰かに認められる必要もない。だから頭の中で、ケンだけがいつ描いたものかわかっていればいいのであった。

「どうなればできあがるのですか？」

執拗に訊くインタビュアー。ケンはますます照れてほほえむ。

「そだなー、絵の中に風が吹いたらな」

そんな時のケンの言葉は思いがけなくきらめいていたりする。画面はもう、人がしゃべる言葉が必要とはせず、

Ⅱ ケンの未完成な絵だけを順に映し続ける。風が吹いているのかいないのか、津軽の大地を描いたケンの絵は、見ているこちらを涼やかにする。

「誰に見せるつもりもない絵ばかり描いて、どうやって生活してこれたんです？」

誰にとってもケンの不思議は、不思議でしかない。かつて香魚子も同じことを訊いたものだ。(2) ケンはふたたび、はにかみながら口ごもる。

人はどうして、そんなに人の金回りが気になるのだろう。うちにやりんごの畑もあるし、カネなんぞ使ったって絵の具やキャンバスを買うぐらいなものだし、申し分ないではないかと思う。そう、申し分ない。

事実、東京で絵を学ぶ夢を捨てて帰郷した時、明日から何をして食べていこうと思ひ惑わなくとも、ケンは何不自由なく生活できた。贅沢とは無縁だったし、上羽家には不足のないりんごや田畑の農業収入があり、それに——それに、ケンと

してはまことに(c) (注3) 忸怩たる思いにはなるが、彼の妻の万里子に、一人前の男以上の収入があったからだった。

しかし、この部分のインタビューはなかった。ケンの娘は遠くに住んでいるから、裏付けの声を撮ることはできなかったのだろう。

むろん、手元の資料でその記述をみつけたディレクターは、目を輝かせたものだ。

「奥さんが学校の先生でいらしたんですね？ では教育者ご一家ということですね？」

当時、東京の師範学校を卒業した女など、この界限かいがいにはいなかった。女学校ですら一部の恵まれた娘しか進学できない中、その女学校で教鞭きょうべんを執り、教科は、重要科目とされて男性教師でさえも荷の重い数学を担当した。

「あんな時代に、すごいっ」

同じ女性であるからか、インタビュアーは感激したようだが、さてケンはどう反応してよいものか、眼鏡の下で曖昧に笑い、顔をそらす。その視線の先で、フクがやはり苦笑しながらこちらを見ていた。

奥さん、とは呼ばれずに、先生、先生、と敬われていた万里子のことは、フクも、村のすべての女と同じ、いつも遠巻きにまぶしく見ていたことだろう。その妻こそが一家の担い手であり、だからこそケンは、家族を養うという義務から解放された特異な存在でいられたのだ。

だが(3) ケン自身の口からは、一度も妻については語られたことがない。それは、長く苦勞をかけた妻に対する礼だと思っていたのだろうか。常々、自分ほど勝手気ままな男はいない、と謙虚に思う彼にとって、妻は、夫が勝手にあれこれ言及すべき所有物ではないのであった。

—— おれはただ、絵を描けば、それでよい

若かりし日に書いた詩が、今また胸によみがえる。絵に表すまでには至らぬ心の叫びを、ケンはそうやって言葉で吐き出していた。いつもゆつたりとしたケンであっても、絵に比べれば、言葉は驚くほどのスピード感をもっていたからだ。

その絵が、何かのたしに、なるか、ならぬか

家族に、つらい・思いを、かけるのは、おれもつらいが

ケンの書く文章はいつも骨太で揺るぎがなかった。迷っていたのであろう、悩んでもいたのだろう。絵を描く、そのこと

が何かのたしになるかならないか。先祖伝来の土地に守られ、妻に養われるその背景で、一人、好きな絵を描いて暮らすのが、誰かを幸せにしたり何かのたしになるのか、ならないのか。

考えても・考えても・行きつく・ところは

いかに・わがままで・あろうと・なかろうと

それより道はないと

消化しきれぬむきだしの言葉がごろごろしていた。それでも結論として、自分は絵を描くだけだ、とたどり着く。だから彼にはいつさいの揺らぎはない。

「では、ケンさんの中では、生活と芸術は、別、ってことですね？」

生活と芸術。そんな大問題に、即答できる絵描きはいらぬのだろうか。

よほどの才能と幸運にめぐまれないかぎり、いきなり絵を売って暮らしていける者は、ほんのひとにぎりもないだろう。ではどうやって食べていくのか、どうやって画材を買う金を得るのか。音楽にせよ文学にせよ、芸術で身を立てようとする者たちなら、一度は向き合うジレンマだ。悩み、迷って、そして妥協という名の出口を見つけて歩いていく。

フクも例外ではない。美術学校の教壇に立っていた期間は長いし、子供相手の絵画教室を開いて大勢の後進を育ててもきた。ケンよりはずっと稼いでいるし生活力もある方だ。だがケンのように、存分に絵を描く自由にめぐまれているかといえば首を振るしかないはずだ。

ならば生活に徹すればいいのに、あきらめられない、だから描く。

絵で認められたいと願うこと。それはいけないことか。野心は悪か。彼らはかつて何度も絵描き仲間議論をしたものだ。うまくなればなるだけ野心は高まり、絵も変わる。そもそも人に見せたい褒められたい、もてたいという願望がなければ、芸術は発展しただろうか。

だが、ケンは議論からこぼれた。もとよりケンには功名心などひとかけらもないし、人の評価も論外だった。見せたいと思わないし高い金で売りたいとも思っていない。彼は、世間の価値観とは遠い水域にいて、⁽⁴⁾濁りなきまま浮遊を続ける絵の魚だ。

(d) 奇しくもケンがみずから口を開いた。

「カネのために絵を描くと、それは違うものになる。どこが、(e) 素晴らしい絵になってしまふ」

木訥だが誠実な彼のしゃべりは、あたたかな味があって、そのつど皆をはつとさせる。そしてインタビューに、うなずくことも忘れさせる。テレビを見ている香魚子も、ケンの言いたいことなどつくに知ってはいても、ケンの言葉に打たれたように聞き入るばかりだ。

(玉岡かおる『ひこばえに咲く』)

(注1) 香魚子——ケンの画集に感動して、ケンと知り合いになった女性。

(注2) フク——ケンを慕っている絵描き仲間の女性。

(注3) 万里子——ケンの生活全般を支えたが、現在は亡くなっている。

問一 傍線部(ア)「納屋」(二箇所ある)の「納」と同じ音読みをするものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。 解答欄 ア

- ① 納付 ② 納戸 ③ 大納言 ④ 納豆 ⑤ 出納

問二 空欄 I II に入る最も適当な語を、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。一つの番号は一回しか使えない。

- ① わざわざ ② ぼんやり ③ ひたすら ④ いたって ⑤ いかにも

解答欄 I イ · II ウ

問三 二重傍線部(a)～(e)の各語句の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答欄 エ ク

(a) あますことなく

エ

- ① 隠すことなく
- ② 細大もらさず
- ③ おしつけがましく
- ④ ぞんぶんに
- ⑤ いやというほど

(b) 頭ごなしに

オ

- ① 何も聞かずに一方的に
- ② 考える間を与えずに
- ③ 頭を押さえつけて
- ④ 顔と顔を近づけて
- ⑤ 自分を主張して

(c) 忸怩たる思い

カ

- ① ためらう気持ち
- ② すっきりしない気持ち
- ③ 悔しい気持ち
- ④ 恥じ入る気持ち
- ⑤ わびしい気持ち

(d) 奇しくも

キ

- ① あきれたことにも
- ② 思いがけなくも
- ③ ためらいながらも
- ④ 大胆にも
- ⑤ 浮かれながらも

(e) さもしい

ク

- ① いい気になった
- ② 手応えのない
- ③ 目立とうとする
- ④ 疑わしい
- ⑤ こびへつらった

問四

傍線部(1)「そうだな日付を入れておけばよかっただな」とあるが、この言葉でケンはどういうことを述べているのか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄

ケ

- ① 自分は気の向くままに絵を描いてきたので、いつ描いたものかということに関心を払わずにきたが、これほど注目されるなら、日付を入れておけばよかったということ。
- ② 自分の絵に日付を入れる習慣がなかったため、これまで日付を入れないまま過ごしてきたが、絵の枚数が多くなった今では、入れておいた方がよかったかもしれないということ。
- ③ 日付を入れることは自分にとっては不要なことなので、考えたこともなかったが、自分の絵を人に見せるような日が来るのなら、入れておいてもよかったということ。
- ④ 自分は自分だけのために絵を描いてきたので、日付は必要ないと思っていたが、こうして振り返ってみるためには日付を入れておけばよかったということ。

問五 傍線部②「ケンはあるが、このときのケンの心情の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。」

解答欄

コ

- ① たいしてカネのかからない自分の暮らしは他人に話すほどのことではなく、まして自分が一家の家計を支えてきたわけでもないのに、よけいに話にくいという気持ち。
- ② 人に言うほどのかせぎは自分にはないし、それなりにつましく暮らしてきただけなので、いちいち生活の内実を事細かに聞かれても答えることはないと思う気持ち。
- ③ 自分は贅沢な暮らしをしたいとは思わないし、生活には困らないくらいの農業収入があり、それを誇りに思っているが、説明しても理解されないだろうという気持ち。
- ④ 自分がこれまで何不自由なく暮らしてこられたのは妻の収入のおかげなので、そのことには感謝しているが、それをテレビカメラの前で話すのは恥ずかしいという気持ち。

問六

傍線部(3)「ケン自身の口からは、一度も妻については語られたことがない」とあるが、この表現からわかるケンの心情の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄

サ

- ① 自分は妻のおかげで自由に絵を描くことができたのだから、妻の苦勞について見て見ぬふりをするのが妻に対する最大の感謝の気持ちを表すことになるという気持ち。
- ② 自分が絵を描くことについて何か言いたいことがあったとしても何も言わずに、いつも自分を見守ってくれた妻に対する感謝を言葉にするのは難しいという気持ち。
- ③ 自分は自分に対して誠実に生きてきたつもりであるが、自分の自由が結果的に妻の犠牲の上に成り立っていたことは明らかなので、今さら言うことは何もないという気持ち。
- ④ 時には迷いながらも、自分が好きな絵を描いて暮らすことができたのは、妻が生活を支えてくれたからなので、自分は妻についてどうこう言える立場にないという気持ち。

問七

傍線部(4)「濁りなきまま浮遊を続ける絵の魚」とあるが、この表現が表していることとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄

シ

- ① ケンは、ただ絵を描きたいがために描いていて、功名心や野心は不要なものだと考えているので、魚が泳ぎ続けるように本能的に絵を描いているということ。
- ② ケンは、絵にまつわる付帯的な価値とは無関係にただ描くことのために描いているだけなので、澄み切った水の中を泳ぎ続ける魚のように純粹な存在であるということ。
- ③ ケンは、絵描き仲間のように何のために絵を描くのかということに関心を持たず、自己満足だけを目的にしてきたので、ただ生きるために泳ぐ魚と同じであるということ。
- ④ ケンは、絵を描いて生計を立てる必要がなかったので、絵を描くということに虚栄心を持つことなく、魚のように淡々と生きてきたということ。

問八

本文の表現の特徴を説明したものととして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄

ス

- ① ケンの絵を世に紹介するということに価値を感じる人々と、そのことにとまどいながらも、あえて反発しないというケンの複雑な心情をそれぞれの人物の視点から描いている。
- ② ときにはケンの内心の思いを直接表現してケンに寄り添う立場をとりつつも、三人称の視点に立つことを基本とするので、ケンの世界をより印象的に描いている。
- ③ 場面の展開ごとに回想の場面を挟みながら、ケンがなぜ無欲に生きることができたのかという事情を明らかにすること、こだわりのない生き方を生き生きと描いている。
- ④ 悩みをかかえながらも絵を描くことに喜びを見出して純粹に生きるケンの姿を、芸術の存在意義に関わらせながら、心理描写に比喻を多用して臨場感豊かに描いている。